磐城之實業　第二百九十二號（一）
昭和十三年七月一日
（大正十四年十一月十八日郵第三種郵便物認可）

磐城之實業
（毎月二回一日十五日發行）
發行兼編輯人　大和田與兵衛
印刷人　大和田與兵衛
發行所　福島縣平市仲町二十三番地　磐城之實業社　電話七二九番
印刷所　大和田印刷所　平市仲町二十三番地　電話七二九番
定價　一部　金五錢郵送料　一ヶ年　一四廿錢
廣告料　一行三十錢
廣告取扱所　平市仲町二十三番地

公平を『モツトー』に……正しくて

明年平市部縣議戰の頗る興味ある比較論

前途に横はる種々の推測

明年の縣議戰に出馬せんとする諸君は既に本年に這入つてからは其の準備工作に寒暖を廻らしてゐる候補者の顏振れは前號に報道して置いたから茲には前回各候補者の得點を掲げて論評に移る事とし是は關内野崎兩君が市部から立候補するを建前として也。

町村名	總數	棄權	投票	草野正一	關内一郎	小松章	小野寺晋	沼野平龍	鮏崎滿藏	次點	齋藤正
平	三、九四	一、九三	三、一〇一	五八一	一、三二一	八〇	一二一	五五	八七	四三	五六
平鎮	六四	九五	一一〇	一〇〇	二	一一	九八	二	二	二	二
飯野	六〇	九六	八〇	二六	二	八〇	九	一	一	一	一
鹿島	六一	七七	三	七七	五	一五	一〇	九一	一	一〇	六
江名	一、一〇〇	一八	一、〇一三	八	六	四六	一九二	一五二	三	九	一
豐間	七〇	一五	六五	六	二	一六	一四	一六五	八	一	三
高久	五六	九	四七	五	一	二六	一六	二六五	二六	一六	三
井	四〇	八	四五	四	一	一	一六	一七	一六	一七	西
夏谷	六七	六	六一	六	八	一六	一七	一六	一七	一六	一
神	九六	一四	九二	四	一	一	一	一	一	一	一
草野	二四	三	一五二	三	一四	一五	一六	一五	一四	一五	一
大浦	八四	七	一五二	五	一八	一〇	一六	一四	一四	一〇	一
四倉	一、二九	一〇	一二九	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇
大野	六一	一四	四六	二四	一三	一四	一三	一七	一三	一四	一六
赤井	一、九九	一七	一〇八	一〇五	一三	一四	一三	一七	一三	一四	一六
上小川	四四	四二	一〇一	九	一	一	一	一	一	一	一
下小川	四四	六四	一〇一	九	一	一	一	一	一	一	一
前川	六六	三五	三〇	一四	一	一	一	一	一	一	一
三坂	五一	一六	三六	一六	一	一	一	一	一	一	一
澤渡	三〇	一五	一五	一四	一	一	一	一	一	一	一
永戸	二六	一四	一二	一四	一	一	一	一	一	一	一
箕輪	二六	一四	一二	一四	一	一	一	一	一	一	一
好間	二、一九	三六	一、九〇一	六五	一三	一〇	四一	五五	一〇一	一	一〇一
内郷	四、四〇一	五八一	三、七四七	八八	四七	五一	一、二五	三八一	一六一	一六一	一六一
湯本	二、五五	一〇七	二、三〇八	九九	六一	一〇七	二六四	四三	九〇	一五	八七
磐崎	一、六六	三五一	八〇一	九	一四	二五一	一四	六	一一	四	四七
上遠野	九〇四	一〇八	七五六	四	一三	一九七	九九	一	一	一	一
入遠野	八六	一三二	六二一	五	六	一〇〇	六六	一三	一六	一三	一
田人	一、〇四一	四七	九九一	三	二	一五三	四〇	三	一	一	一
川部	七五一	一〇一	六五一	一	二	一九四	二	一	一	一	一
勿來	一、五〇四	一五二	一、三一一	一	一	二四一	一九	二	三	二	二
錦	六三一	一七	五五六	一	一	一九〇	一七	一	一	一	一
山田	六五	五六	五六	一	一	二〇一	二七	一	一	一	一
植田	一、二五	一三八	九七	三	二	一〇一	二七	一	一	一	一
渡邊	四六	九	三五	一	五	四七	五一	三	一	一	一
泉	六六	一四	六五一	一	九	九	七	九九	一八	一	一
玉川	四七一	四	四〇〇	二	九	九	一〇一	一	一	一	一
小名濱	一、九五	一〇五	一、五〇	一〇	八	五一	一、四九	一	一	一	一
合計	二、〇五五	六、八五一	三、一四四	五、四九五	四、八六	四四六	四、四六	四、四四	四、〇八七	三、九六	一、三四

以上の得票の結果を檢討するに野崎滿藏君が明年立候補するとすれば郡部必ずしも樂觀を許さずと云ふことになるのである、草野と平鎮との票を控除する時は九百五十五を失ふことゝなつて是れを他町村より求むるとすれば片濱方面は平小磯道問題から面白からざるの觀あり、勿來は今弟町長の關係から或ひは前回の十二票よりは多しとしても律義者たる横山太一氏が私情に左右さるゝとも思はれず其他總して增減なしとして或ひは增加の情勢にあるは好間村ならんか、斯く考察すれば消長を策遲ふは當然かも知れない然し政黨者流に奇謀の用意ありとすれば格別なり、此處に於て市部を撰ぶにはあらざるかと思はるゝの節は氏の部下にして比佐代議士の援助を乞はんとしたる者あり此點兩者反目の從來の感情を水に流して民政一丸主義は勝んが爲めの方略なるべし。

投票の算定

平市五千票の半數以上を獲得するには野崎君はどうしても民政一致の必要があり草野三郎君前回の五百八十二票の此の大半と運沼龍輔君の五百九十五票の大部分とを合せる必要が實際に於て生ずるのである、昭和六年の選擧には平が六百五十に平鎮が五十五票であつたのである今度は市會議長と云ふ肩書があるから野崎ファンも增加はあるであらうが野崎派に非らざる民政派と運沼君に投票した政友支持者が確實に混成するとも見られないものがあらう、此處に野崎君の苦心と努力とを要する理由が存在するのである。

關内君の立場

關内正一君は現在市部選出となつて居るので明年も勿論平から立候補することであらう前回の初陣に於て野崎君を凌駕すること遠平で四百六十五の平鎮で百二票の多數を見せて居る、民政二派が混然一致すれば關内君の弱體となるも政友是又二派中の一派が野崎派に全部合流するとも考へられない畸形的市政界の現出を以て推測は許さないとして關内君の立場に同情が起る所以とならう、然し兩者何れとも豫測は絶對に許し得ざるの情勢で興味は今後增々加はることであらう。

本店第一主義
常陽銀行支店の卷

本縣の各地に支店出張所を設けて在る常陽銀行は本店萬能主義で支店に於ける貸付などは千ともまとまつたら本店の指揮を受けることになつて居るらしい故に支店の權限や人物を品評するよりは水戸市の本店首腦部の人物を檢討して取引參考とした方がよいと思ふ是等をよく知つて居る者の批評は左の如く言つて居る。

龜山頭取評

常陽の現在は何處から眺めても希望だらけのようだが扱てしかし世間の採點は案外辛い株價は依然四十七八圓絡みを脱せず内容と外觀との間に横たはるギャップを暗示してゐるかのやうだ金か物かが近頃話題になつてゐる、事業は金に在りの定則は何時の間にか事業は人に在りと訂正されて了つた事業を語るには先づその人を知らねばならない、そこで常陽を動かしてゐる人達だが、この大世帯を切廻して全機構のハンドルを握つてゐるのは云ふ迄も無く龜山頭取佐藤常務、三宅支配人である龜山氏は知つての通り川崎子爵ひの諸代男だ銀行人として足一歩も川崎を離れたことがない銀行道を脇目もせずにコツ〳〵と歩ゐて來た叩いたら恐らく『川崎々々』の音がするだらう石橋金杖的の川崎の掟が骨の髓まで泌込んでゐる無論金融事業にかけては、其永い經驗からしても底の底まで知悉してはゐるだらうが、どちらかと云へば手腕よりも手堅さが今日の地位を築いたとも見られる温床に育つた最も善良なる銀行マンである他人の金を預るのが商賣だ堅いに越したことはないが平の貯蓄銀行とは違ふ普通銀行には自ら別の使命がある筈だ一行の盛衰を背負つて立つてゐる龜山氏たるもの、大悟一番、積極的に奮ひ起つて公的機能を十二分に生かすべきではないか東京と水戸とのかけ持ち生活なども此際御破算にすべきである。

常務・支配人

常務佐藤氏は川崎の大家老杉浦翁の婿だ、閨閥などを云々されたら御本人も定めし不快だらうし事實またそんな關係がなくても立派に一本立でやつて行ける人物だ杉浦の婿だからと云ふ一言でその實力まで否定されて了ふことは堪え得ない屈辱に違ひない雖者もそれには同情する然しなんと云つても此の事實が佐藤氏に取つて大きな强味となつてゐることだけは確である自身意識的にそれを振り廻はさなくとも相手は決してその背光を見逃さないだらう習性を成すとさへ云ふそうした環境に置かれたら時には錯覺も起さうではないか佐藤氏に對して若し劣しからぬ評判がありとすればそれは錯覺の罪だと思ふ三宅支配人は自他共に許す明敏な頭腦の持主だ事實また常陽の營業方針は三宅氏の肚裏に出るものが多い名實兼備えた支配人であり至實三宅である只頭腦明敏型には理論家が多い三宅氏も可成りの理論家だと云はれてゐる銀行屋に理窟は禁物だと云ふ言葉にも一面の眞理はあるが理論必ずしも悪るくはない實務を裏付ける理論條理に一致した實務なら正に鬼に金棒これほど結構なことはないが多くの場合、理論は實務から遊離し易いものだ理窟と實際は一致し難いのが通例である理窟だけでは實績は擧がらない況んや川崎系銀行では理窟は御法度だ。

× ×

支店には佐藤常務の腕力が强いとのことではあるが貸付には三宅支配人の許可を必要とするなど命令系統に兎角齟齬が生ずることがあるとは此邊から發生して居るのである是れで支店の全貌が知れよう。

植電合併結果如何

福島電燈に植田電力が合併することを監督官廳たる仙臺逓信局が反對を表示したるにもかゝはらず見事合併するに至つたのであるが主務省は果して之を何んと裁斷することであらう電力國策としての統制方策の理想としては電力設備を統合して技術經濟上に於ける最高能率を發揮せしめて共の運營は國家意圖に即せしめ以て獨占の惨禍を抑へ發電原價の低下を計り電力配給の合理化を期することにあることであらうから配電事業統制の擴充强化を圖る爲めには區域の整理統合を爲さなくてはなるまい、是から云ふならばお隣の大日本電力と合併するのが妥當ではあるが該社は合併價値を低下に見積つて相談にならなかつた結果が福電となつたのであらう、法文に權威があるかそれとも個人所有財産權が强いかは最後の成行を見るより他はない。

株屋の多くなつた平市

平市に最近五六軒の株屋が營業してゐる、これは地方人に投機熱が盛んになつて來た現象であらうか、それとも株屋自體が大いに組しやすしと見ての開店か、何れにしても數名の店員を使つて經營して居るのであるから投機熱の勃興には相違ない、株式市場の主力株が不動の姿勢を執つて共處に利益の見るものがなければ手ひ競ふて端株雜株の思惑に沒頭して買つた買つたと騒いで居るらしい、貯蓄强調の今日世は樣々である。

理想生活

筆者は金が無くて仕事をして居る、だによつて技巧も粉飾もする必要がないが努力は人一倍にして居る積りである、けれともなかなかに數字が思ふ樣には進行して來ないので閉口して居る十二分の力を以て十分の生活をなし、八分の力、七分の力不完全の力、幼稚極まる實力を以て力量以外の生活を仕樣とは思はない知足安分の生活の極致は即ち左の如きものではあるまいか

○虚榮を去る生活
○名聞を去る生法
○華美に遠ざかる生活
○冗漫を除く生活
○簡名直截の生活
○艶消の生活
○頓悟の生活
○外物に動せざる生活
○小、大を兼ぬる生活

此生活こそは自己と他を僞瞞する不自然の存在を許さないことであらう、之をハイカラに云へ換れば天道に合し、人道に合し、地道に合すべき大理想生活であらう、我等はこれを弘布宣傳しても貧乏人の泣言とも笑はれないであらう。敢て賢者識者の御批判を乞はんとす呵々。

省納常磐炭

常磐炭の鐵道納炭は遂年契約の增加を示してゐる昭和十一年度は六十四萬七千百七十噸價格五百五十五萬五千二百圓で噸當り八圓五十三錢となり十二年度は六十萬五千三百十三噸五百八十七萬九千六百八十圓、噸九圓七十一錢本年度は六十五萬六千噸八百九十九萬七千三百六十圓で一噸十三圓八十一錢に當つてゐる、斯の如き相場は常磐炭が省納となつて以來の高値を見せたことで戰時工業の影響であらう從つて炭山景氣のよいのも當然である而して常磐炭田中心地の綏驛が營業用炭としての各地に輸送する運賃收入は一日平均一萬圓を下らぬと云ふ

電力關係三人男

後退の金成・進出の栗原

田子・今後の

◎越して電力關係三人男とは己の牙城たる植田電力を身賣りして電氣界の第一線から退へた金成通氏と荒川電力社長にして日曹コンツエルンの役割中に這入つて然も中野友禮社長の智囊者の一人となつて新興コンツエルンの一方の雄として愈々活躍が期待される田子健吉氏と脇目もふらずに他近平電力の擴張計畫を強行して會社の好轉一本調子を計りつゝある平電力社長栗原欣次郎氏を無遠慮に評論せんとするものである。

◆

◎先づ順序として金成通氏を評せんか氏は人も知る通り貴族院議員で明年の改選期にも再出馬を豫想されて居る、氏は頗る理智に優れ常に燃ゆるが如き何物かを計畫して居るものゝ如く今度の植電手放しも潮時と思つてのことであつたらう、けれども世人は貴族院の金成としてよりは植電の金成として存在を認め敬意を表して居たやうに思はれたのである。

○

◎今日までの植電は決して順風に帆を上げて彼岸に達したものではない艱難辛苦時代は隨分長かつた、さは去りながら己の意志を貫徹することや目的達成には猪突猛進の奮鬪をし此處に聊か横紙を破つて進むの觀なきにしも非らずではあるが是れ即ち長所で成功した所以かも知れない、けれども氏は決して足許を忘れなかつたのである。

○

◎事業なしの金成氏に單に貴族院議員の肩書のみを付けて置くことは獨り高く冲天に聳えてゐる富士のやうで何んとはなしに淋しい、孤影寂寞だと云ふ感じがする、事業に通味を持つて居る氏の將來は福電かそれとも農銀か將又新事業か單調に余生を送る流儀の人でもあるまい。

◆

◎近づくものに春風駘蕩の感じを與へる田子健吉氏は世の中の苦勞人である、人生の體驗家でもある月給六十圓の新聞平記者から編輯局長、主筆を兼て經營者たる事務となり新聞界から足を洗つて前後八年此間政界の人ともなり、今日堂々たる事業家となつて資産八十萬を算へ今後何百萬圓にするかは知れない風運兒である。

○

◎電氣業の傍ら乾坤一擲の鑛山事業は行くとして可ならざるはなく、日産と提携して富源の開發は資本投下に益々其の理想が實現されつゝあるのである、此の手腕力量を見拔いたのが日曹中野社長で此處にかたい握手は結ばれたのである氏は敏腕に優れ居るも人生觀事業觀は情熱を徹底に冷靜を以て處することに努力し運命に關しては日本の傳統的精神を尊重し打算を超越し、氣節を負つて進退を決する處に大の長所を認められて當代一流の實業家と相拮するを得る所以である。

○

◎政治に熱狂して風雲を捲き起したかと思つて居るうちに政爭を逃避して眞の實業家となつたが或ひは政界に於ては休息中の噴火山であるかも知れない貴族院に其席を占むべく激情の爆發を保しがたい、氏には躍進性が多分に存して現實に滿足して居ないらしい先づ山外山ありて山盡きずと云ふのが其の性格であらう。

○

◎最近石城の天地に一大事業を起すべく準備中なるも暫く默して發表は余日に讓ることとする。

◆

◎過去に於ては興亡治亂と云つては少しく形容過るかも知れないが兎に角、波瀾があり曲折があつた平電力會社の其の社長の椅子に居る栗原欣次郎氏は消極的或ひは保守的の色を帶たるかの觀あるも、さに非らずして事業の發展、對應策にはなか〳〵の積極的である、非凡なる手腕と賢實主義を信條に細心綿密に一歩々々と進軍をつゞけて居るのである。

○

◎氏は殆ど全部の業務を擔當して居るかの如くにして拮據經營に當り徹頭徹尾事業に沒頭して他を顧みず全くの一人一業主義である、會社の今日に至るまで其の經營が難行起伏に富めるだけそれだけ氏の苦勞の程度も尋常以上に出で又幾多の鍛錬は堅忍剛勇の氣象を生んで物に動するところが薄く、目下問題視されて居る大瀧發電所の驚きなど思慮周密にして遺算なきを期すべく各方面に注意を拂つて居る

○

◎事業に對する熱心さは胸中常に一團の活火あり、奮ふべからざる自信を有し財政愈々富で成金列傳中の人たり、日夜東西に奔走して倦むところを知らず渾身事業の權化たりと評して筆を納める。

松ケ浦海岸に遊覽會社創立

勿來町松ケ浦海岸を遊覽地となすべく資本金七萬圓の株式組織を以て鑛泉旅館、料理店其他の設備をなして鄉土人は勿論、大衆氣の助川邊よりの遊覽者を吸引すべく縣議小松章氏、町議赤津修一氏、園部里治氏等協力して有名の勿來趾を背景とし地方發展策として奔走中であるから近く實現を見ることであらう。

更新の〝磐城海岸軌道〟

熱の支配人の願望達成

日曹系となつた泉、小名濱間の磐城海岸軌道は近く百萬圓程度に增資を斷行し七十五萬圓の豫算を以て鐵道を敷設すべく地元小名濱町並に縣當局の承認を經て地方鐵道變更の認可申請書は目下鐵道省關係に廻つてゐるから許可が下り次第工事に着手する事となろう、斯くなる時は地方鐵道補助法の適用を受け四分配當の保證されることゝもなり石炭硫安、鮮魚、旅客其他の貨物輸送量の膨脹によつて增收利益を見られることであらう而して支配人たる熱の人西丸猛氏の獻身的努力によつて軌道を鐵道に變更し地方産業を振興することが出來るので地方民は氏の手腕と奮鬪に感謝し居れりと云ふ。

君香姐さん

兩手に花か

植田町山田屋の君香姐さん油が乘つて來た年頃の勢か交渉の仕様では兎角男を無性に嫉しがらせるとこゝふ評判、雜貨屋の若旦那と町議の丑さんには內密にして頂戴なとはご本人の口からではないが丑さん君香に限つては浮氣など出ず女ではないと『志富川礦泉』を根城にしての逢瀬を樂みにして居る事を何だか山の神がウス〳〵知つて來たらしいので商賣用件にかこつけての密會見と作戰は變へたが一室での長期交戰も出來ず早く歸りたがるのを君香の方では玉代からの賠償と慣慨ちうものをして見せるので丑さん氣を揉む事非常なもの但し夜はあの若旦那と娼賣熱心に隣のお座敷などではトテモ聞いては居られない程の變の戲言を繰返してさん〳〵イチャ〳〵して居るとは君香の腕も大變なものとは決して岡燒半分での噂ばかりではないらしく人組のアノ人こそ可愛想なり。

渡邊氏の鄕土啓發

愈々實際運動に着手す

石城郡夏井村出身で今や帝都に成功し教育、産業各方面に活動して居る渡邊豐重氏は十數年以前磐城の炭田に於ける事業は事志と異つて失敗の歷史であつたが上京後の今日の位置は鄕黨の模範たるものがあつて此處に鄕土青年の爲め立志會の結成をなし左の理想を抱懷しての活動となつたのである。

×

東洋平和の爲めに暴支に皇軍が聖戰を交へて居る我帝國の中堅として國運の將來を卜すべき青年は眞劍に時代精神の涵養に努力して貰いたい。即ち道德的行動は先哲偉人の高節を學ぶ如く、一見至難のことのやうではあるが、歷史に鑑み、體驗に顧みれば時代的變化の思潮は吾人をして自然に啓發せしめてゐるのであつて敢て行ふと云ふ決心さへして起てば眞に易々たるものであると思ふ。今や都會生活は輕佻浮華の思想に感染して純朴なる村から村へと此思潮は流れ込み高き國風は次第に蝕ばまれ愛すべき農村氣風の基礎は搖がんとしてゐる現實の狀態を默視するに忍びないものがある。

此の風潮は驚て自然の順序として遂からず都會と田園の對立、乃至何等かの混亂を誘發すべき隙極へと進むものと思ふ。實に力强く且正確なるものは時代の變化である斯ふした觀察を一片の理想論として突殺する譯には參らぬ何時の間にか時代變化の大勢が概念的觀念となり實勢的壓迫が必然性によつて時代の現れとなる事は歷史が物語つて居るではないか。凡そ人間の生活は學理と謂ひ政治と謂ひ思想と謂ひ何等確定的眞理の等きあるものでなく時代の變化即ち實勢に制されるものと觀察せられるのである。

今や現在の社會生活は異常な危機に當面してゐる、是は各人が現代の社會生活と離れた步調のもとに進みつゝあるがためであつて、言ひ換れば時代の認識なくたゞ宇宙間に棲息する生物的定義に盲動し形ばかりの生活が行き詰まつたものと斷ぜねばならぬ。我等萬物の靈長たる人間として然も知き人生に於て餘りにも無意義な過ごし方ではあるまいか。時代變化を概念的に認識し之に對應する時代精神を以て現代に處するとせば政治問題に對しても、經濟問題に對しても、ある程度迄現代社會生活の不安危機を脫する事敢て難くないと信ずる者である

宣言

本會ノ創立ニ至リタルハ篤志家渡邊豐重先生ノ熱烈ナル愛鄕ノ至誠ニ倚ルモノニシテ本會會員一同ノ感激措ク能ハザル處ナリ

發會式ヲ擧行スルニ當リ會員一同本會創立ノ趣旨ニ從ヒ奮勵努力已ヲ持スルニ正シク會員相互ノ團結ヲ鞏固ニシテ和衷協同小ニシテハ明ルク住ミ良キ鄕土ノ建設ニ大ニシテハ皇國興隆ノ爲ニ全精神ヲ傾注セムコトヲ誓フ

右宣言ス

決議

一我等ハ皇國臣民タルノ大自覺ニ基キ報本反始ノ精神ヲ培ヒ産業及教學ヲ通シテ明ルキ鄕土ノ建設ニ邁進セム事ヲ期ス

一我等ハ天地ノ公道ニ基キ尊王絕對ノ信念ニ生キ皇道精神ヲ根本トシテ上下照合隣保相助ノ美風ヲ作興セムコトヲ期ス

右決議ス

綱領

一尊皇愛國ノ至誠ニ生キ敬神崇祖ノ信念ヲ涵養スベシ

一修身齋家ヲ基本トシテ隣保相助以テ明ルキ鄕土ノ建設ニ力ヲ致スベシ

一自己ノ職業ヲ正シク認識シ各々職分ヲ遵奉シテ國家社會ニ貢獻セムコトヲ期スベシ

一報恩感謝ノ念ヲ培ヒ本會會員トシテノ使命ヲ全ウセムコトヲ努ムベシ

磐城青年立志會